

現代能歌劇「羅城門」

現代語台本・作曲：小菅 泰雄

原作：観世小次郎信光作謡曲「羅生門」

時 平安時代中期 春

所 平安京の大内裏・羅城門

登場人物と配役

さくら 奥の方付の腰元 今井 照子 (ソプラノ)
奥の方 源頼光の奥方 清水 邦子 (メゾ・ソプラノ)
源頼光 平安中期の武将 橋本 博之 (テノール)
渡部綱 源頼光の家臣 柰子 淳 (バリトン)
藤原保昌 平安時代の貴族 柳澤 安雄 (バス・バリトン)

第一場「大内裏」

前奏

奥の方のARIA「京の都の」

奥方 京の都の九条朱雀に羅城門という立派な門がございます。延暦十三年の建立で、高さ7間、間口9間、前と後ろに5段の石段があり、それはそれは大きな門で二重の瓦葺き、正面、羅城門という額が掲げられ、都の安寧を願って毘沙門天を安置しています。

さくらのARIA「時は春」

さくら 時は春、花は咲き蝶は舞い、鳥は歌う。帝の御姿は麗しく、民は幸せに過ごしています。

さくら、奥の方、頼光・綱・保昌の五重唱

九重の春は久しく。帝の御姿麗しく。

源頼光 さあさあ皆さん。ここ春雨の降るきのう今日。晴れ間が見えぬつれづれに。酒でも飲みながら語り合いませんか。

女声二重唱

軒の雨だれ水玉の、春のながめの寂しさに、友と語らう夕まぐれ。

男声三重唱

酒をすすめる盃に、弥猛心は一つになる。思う心に底意はなく、打ち解けてつれづれに。降りしきる宵の雨、言葉にしなじな花が咲き。近くに寄りて語りあう、これぞあま夜の物語。面白やもろともに、もろともに。

頼光 さあさあ皆さん、この頃都に耳寄りの話はありませんか。

綱 ありますあります。九条の羅城門に鬼が棲みついて、夜には人が通らなくなるそうです。

保昌 ちょっと待て。殿の前でそのような事をいうのではない。

羅生門がこの国の正門であってみれば、草木のすべてが帝のもの。どこかの鬼が居場所にすると聞いたなら、鬼神だろうと棲まわせてはならぬ。こんな軽率な噂話を殿のお耳に入れてよいのか。

綱 何と、軽率な噂と言うのか。不審に思うなら今夜にでも、羅城門に行って確かめればよい。

保昌 さては、私が行かないと思っているな。ならば羅城門に行って看板を立てて来ようではないか。

奥方 このようなお話は無益ではございませんか。

さくら さようでございます。無益でございます。

頼光 ウハハハハ。奥たちが、このように申しておるぞ。

綱 保昌に、少しも遺恨はございません。帝の御為ならば、私、渡部綱が看板を立ててまいりたく存じます。

頼光 よく言った！綱のいう通り帝の御為だ。綱、羅城門に看板を立てて参れ。

綱 承知いたしました。

五重唱 渡部の綱は看板を授かり、御前を退出した。羅城門の鬼を退治しなければ、二度と人に顔向けできない運命の狭間。武士の弥猛心は恐ろしい。弥猛心は恐ろしい。

(中入り)